

**英語****【解答】**

I	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	b	d	b	d	a
II	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	b	a	d	a	b
III	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	a	a	d	a	b
IV	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	c	a	d	c	b
V	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	d	a	b	c	a
	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
	c	d	a	d	d
VI	問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
	c	a	d	c	c

## 【学習アドバイス】

本学の入試は、例年5科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となるので、各科目にかけるバランスにもよるが、平均的には50分程度が解答時間となる。2014年度の本学の英語問題は、Ⅰ. 会話問題、Ⅱ. 単語問題、Ⅲ. 長文問題、Ⅳ. 長文問題、Ⅴ. 文法問題、Ⅵ. 整序問題の6題構成となっており、試験時間に対して十分解答できる出題量となっている。

それでは、各大問の特徴を見た上で対策を考えていこう。

Ⅰ. 会話問題は、口語特有の表現やイディオムの知識を問う場合があるが、本学の問題はそのような特殊な口語表現・イディオムに重点を置いたものではなく、文の流れから論理的に導かれる応答を予測させるものが主体である。ただし会話である以上、そこで使われている英語は論説文などとは異なり、省略や含意の理解に委ねられる側面を持っている。例えば、「この部屋は暑いですね」と言われたら、「今32度です」ではなく、「窓を開けましょうか」と応答できるかどうかといった問題である。これに対処するには、訳にこだわるのではなく、会話がどのような場面や状況で行われているのか、話し手がどのように考えているのかを正確に推測することが大切なのである。

Ⅱ. 単語問題は英文の空所補充という形式であるが、その内容は品詞・熟語・文意推測など多様である。やや難しめの語が含まれている場合もあり、注意が必要である。しかし、文意を正しく把握し、選択肢の語の意味がわかれば、必ず正解にたどり着けるようになっている。したがって、こつこつと語彙力を増やすことが最も正攻法で効果的な学習となる。標準的な単語集を1冊仕上げることをめざそう。

Ⅲ・Ⅳ. 長文問題は400～500語程度の英文がそれぞれ出題される。和訳は必要とされず、すべて英問英答形式の出題であるが、全部が英語だからと恐れる必要はない。文章の流れに沿った素直な設問になっているので、選択肢とその対応箇所を比べ、はっきりと誤っている箇所を確認し、選択肢を消去することが大切である。また、判断に迷う場合は、数字・頻度・程度・表現の言い換えに注意して、対応箇所を読み直していけばよい。英文中の難しい語句にはきちんと語注があるので、知らない単語が出てきてもあまり気にしないように。また、英文読解の学習の際に、わからない語句が出てきたら、すぐに調べるのではなく、まず前後から予想し、また和訳にこだわるのではなく、文章の大まかな内容だけでも理解しようという姿勢で英文にのぞむようにすることも大切である。日頃からやさしい文章でよいのでどんどん読んで解いてみるという、実践的な反復学習をすることも効果的である。

Ⅴ. 文法問題の内容は多岐にわたるが、特に重要なのは動詞関連の文法知識である。動詞の語法は言うまでもなく、時制・仮定法・現在分詞と過去分詞の違い・不定詞と動名詞の使い分け・比較級・関係詞など、高校英語における基本事項を確実に身につけておきたい。文法・語法・イディオムなどを扱った基本問題集を1冊しっかり仕上げる必要がある。

Ⅵ. 整序問題は、与えられた日本文に対応する英文の中の6語を並べ替えて完成させる問題である。うっかりミスを狙うような問題はなく、基本的な文構造と熟語の知識があれば解ける。英作文には基本となる英文があるので、それを覚え、また、熟語集などでよく使われる表現をしっかりと確認しておくことが大切である。

英語は、受験勉強といえども実際に使うことが目的である。現在の努力が大学入学後、さらには大学卒業後にも役に立つことは間違いないことである。基本的な内容を確実に身につくように、基本的な語彙をきちんとものにし、基礎的な問題を完璧にしつつ、標準問題を幅広く学習していけば、確実に合格点を獲得できるものである。